

〈特集論文〉

「聞き書き」におけるバタフライ効果について

小田豊二*

作家

Butterfly Effect of Oral Biography

Toyoji Oda

Writer

I. 「聞き書き」とは何か

おや、いらっしゃい。

ちょっと早いんじゃないのかい。えー、早めに来ました？

まあ、とにかく上がってよ。スリッパ、これ、はい。うん、こっちの部屋でやろうと思ってさ、そう、その階段をトントンとおりて、そこ、そこ。片づけておいたんだよ、あんたたちが来るって言うからさ。まだ五月の初めだっていうのに、今夜はばかに暑いな、冷房入れとくの、忘れちゃったよ。えーと、スイッチは…と。

これは、稀代の名優と言われた喜劇役者三木のり平 (1924 - 1999) の「聞き書き」本『のり平のパーッといきましょ』¹⁾ の「第一章 花街の少年」の冒頭の一部である。そして、この文体で、老優の「語り」はある時はうれしそうに、またある時は怒りを交えながら、414 ページの「終章 大雪の夜」まで続く。

そして、この一冊の本のなかで、三木が東京・浜町の待合²⁾ で生まれ、画家に憧れ、日大芸術学部に入學したが挫折。ボクサーを目指したが、途中でヤクザの子分になり、刺青を入れたところで、赤紙が……といった名優になるまでの波乱万丈の自分史を軽妙な語りで展開していく。もちろん、生い立ちだけでなく、映画論、演劇論、そして人生論まで余すことなく語っている。

しかし、これが三木の語りたことのすべてではなかった。なぜなら、取材は三年にも及んだが、全部語り終えないうちに、語り手の三木は肝臓がんで亡くなっている。しかし、せめて、この本が後世に

残ったことは幸いであった。実は、俳優をはじめ、演劇関係者の多くが、三木の話の聞きかたからである。名優は、また、これまで自分の話をほとんど他人にしたことがなかったのである。

この例でわかるように、私にとっての「聞き書き」とは、「話者の話を聞いて、それをその人になりきって、話者の語り言葉で書き、後世に残すこと」である。

三木の例を挙げるまでもなく、人は誰でも「自分が主人公の物語」を生きている。だが、この世に生を受けた人たちの多くが、その「物語」を語ることもなく、彼岸にそのまま持って行ってしまふ。残していけるのは、かなりの著名人か、「自分史」という名の文章を書ける富裕層で、名もない庶民の多くは、何も語らないまま、「ただ黙って」去っていく。

これを何とか残そうとしているのが、「聞き書きボランティア」の活動である。

II. なぜ、話し言葉だけで書くか

いま全国に広がっている「聞き書きボランティア」が一生懸命広め、活動している「聞き書き」の最大の特徴は、聞いたことを文章に残すことには変わりはないが、三木の例でわかるように「話者の語り言葉で書くこと」に力を注いでいることである。たとえば、語り手が長崎のお年寄りであれば長崎弁で、話者が秋田の古老であれば秋田弁で書く。この文体を私は「聞き書き体」と名付けた。

なぜ、そうするのか。それは「聞き書き」において、その人のこれまで生きてきた「物語」の史実もさることながら、「その人らしさ」に最大の重点を置いているからである。

「んだべ」, 「ほんなもんで」, 「やっぱし」, 「そやさかい」, 「まんずまんず」……。こうした口癖があれば, それはそのまま書く。また, 自分のことを「私」とは必ずしも書かない。「あたし」もあれば「おら」もある。「僕」もあれば「俺」もある。笑い声も「その人らしさ」にこだわる。(笑)は厳禁。ワハハなのかフフフなのか, あるいはヒツヒツヒツなのか。「わたくし」で始まれば「オホホ」である。

わかりやすく, 例を挙げておく。

- (1) 私は, 昭和三年五月十五日に東京の浅草の雷門の近くで生まれました。父は為三, 母はヨネ。八人きょうだいの末っ子でした。そのせいで, トメと名付けられたそうです。
- (2) え, あたしの誕生日かい? 昭和三年の五月十五日。場所? 浅草だよ, 浅草。そう, 雷門のすぐそば。おとつあんの名前は為三, おっかさんはカタカナでヨネ。え, きょうだい? これがさあ, 八人きょうだいの末っ子でね。もういらないうんで, あたしのことをさ, トメだって名付けたっていうんだから, ひでえ話だよねえ。そう, 思わない? ハハハハ。

この(1)と(2)は単なる文語体と口語体の表記のちがいでないことは明白である。(1)ではまったくわからなかった人物像が(2)では, まるで目の前に下町のおかみさん本人が突然現れたが如く思えるだろう。まして, この話者を知っている家族や知人は, たとえ, その人が亡くなった後でも, このおかみさんは, 「聞き書き」作品の中でも生き続けるのである。

Ⅲ. 「聞き書き」の方法

次に, 「聞き書き」の「方法」について述べておこう。やり方は容易である。

まず, 話者の選定である。

「語り手」はさまざまである。書き手の祖父母, 父母, 親戚, 知人, 友人の父母, 近所の高齢者, 趣味のサークルで知り合った人, 恩師, 老人施設の入居者, 病院の患者, なかには同じ病院でも長期入院している高齢の夫の付き添いの妻などという例もある。

しかし, これら「語り手」と「聞き手」に共通していることは, 「信頼」である。家族や知人はもちろんのこと, 老人施設の入居者の場合でも, 施設長やケアマネージャー, ヘルパー, また病院でも医師や看護師の紹介があつての上の「聞き書き」である。

語り手が決まったら, 話を聞く。実は, この「話を聞く」行為こそ, 他に類を見ない「聞き書き」の真骨頂でもある。

話を聞く際, 「聞き手」は普通, 「自分が知りたいこと」を聞く。だが「聞き書き」は, そうではない。「聞き手は, 自分の知りたいことを聞くのではなく, 話者が話したい話を聞く」のが鉄則だ。なぜなら, 人は誰でも「話したい話」を持っているからである。

「話したい話」をしている時, 脳は明らかに活性化している。特に, お年寄りが「話したい話」を夢中になって話している時, 明らかに脳は活発になる。一度, 話し始めると次から次へと話が出て来るので, 驚くことが多い。

しかし, 目の前の話者が「いったい何を話したいか」を知るには, どうしたらよいのか。それには, 「見えない薬箱」を持って行く。「薬箱」のなかには, 何が入っているのか。それは「言葉」という名の「薬」である。なぜ, 「言葉」が「薬」なのか。それは, その「言葉」によって, 話者の反応が異なるからである。

たとえば, 「運動会」という「言葉」を高齢者に与えてみよう。すると, すぐに反応がある。足の速かったお年寄りは, 一気に盛り上がる。そうした話者には, 「運動会」という「言葉」の刺激によって, 昔の記憶, つまり海底奥深く沈んでいた「新しい記憶の島」が隆起し, 一気に元気になる。

ところが, 同じ「運動会」という「言葉」でも, なかにはまったく反応のない人もいる。この方にとって「運動会」は思い出したくない出来事なのだ。したがって, 「言葉」という「薬」という観点から見れば「運動会」というこの「言葉」は, この人には効かなかったのである。

そういう場合は, すぐに別の「薬」を与える。「両親の話」, 「子供の頃の遊び」, 「お正月」, 「好きだった食べ物」, 「趣味の話」, 「新婚旅行」, 「孫」……。 「見えない薬箱」から次々と, 「言葉」という名の「薬」

を与え続けるのだ。

不思議なことに、そのなかに、話者が元気になる「薬」が必ず含まれている。そして、話者が「話したい話」をしはじめたら、その話を長く、広く、深く聞き続けるのが「聞く」コツである。

「聞く」の次が「書く」である。

「聞き書き」における「書く」は、「話し言葉」すなわち「聞き書き体」によって表現する。言い換えれば、「その人になりきって」話者の語りを再現するのだ。ただし、その際、大事なことは、テープ起こしにならないこと。話者の語りをそのまま書けば、それは単なるテープ起こしである。

話者が「言った通り」書くのではなく、話者が「言いたいこと」を話者に憑依し、理解してから書く。そうなれば、当然、話者の言ったことと意味は同じでも、ちがう文章になるケースもあるということだ。

ここまで説明した上で、もう一度、私の提唱する「聞き書き」の方法をまとめる。

「聞き書き」は、話者と聞き手の間に「信頼」と「愛情」が存在しなければ成立しない。話者は、信頼できると判断した聞き手に対し、個人情報を提供する。聞き手は、その信頼に応えるべく、愛情を持って傾聴し、話者の気持ちをきちんと理解した上で、その人に憑依し、「話し言葉」で書く。

そして、写真などを編集し、世界で一冊の本にして、話者及び話者の家族に差し上げる。それが私の提唱している「聞き書きボランティア」の目的である。

IV. 「聞き書き」の不思議な力

この「聞き書き」は、ここまで記してきたように、一見、高齢者に語ってもらうことによる脳の活性化や認知症予防に役立つ新たな手段として注目されているが、実は、ここ数年、医療・看護・介護の分野で特に全国的に一気に「聞き書き」が広まったのには、それ以外にひとつ、大きな理由がある。

それは、「聞き書き」には、「不思議な力がある」ことがさまざまな場面で証明されてきたからである。

たとえば、「聞き書き」を知った医師は、「患者さんの病気を診るのではなく、人生を診る」と宣言し、

訪問医をしながら患者さんと昔話をする³⁾。またある病院⁴⁾では、看護部長の名で、病院内に「聞かせてください、あなたの人生」というチラシを配布した。「聞き手」は看護師と「聞き書きボランティア」である。長期入院患者や高齢の患者の付き添い者が希望する。

また、医院内の認知症患者のデイサービス⁵⁾では、お手玉や羽子板などの昔の遊び道具を見せ、参加者が楽しそうに思い出を語るのを、待機している「聞き手」が文字化する「聞き書き」が定期的に行われている。

こうした行動により、「語り手」と「聞き手」の距離が一気に縮んただけでなく、これまでになかった心のこもった医療や看護、介護が可能になった。

「聞き書き」における不思議な力、これを私は「バタフライ効果」と呼ぶことにする。

「バタフライ効果」とは、アメリカの気象学者エドワード・ローレンツ（1917 - 2008）の「ブラジルで蝶が羽ばたくと、テキサスで竜巻が起こるか」という講演から生まれた言葉で、初期のわずかな変化がその後の予測を困難にするため、気象の長期予報の不確実性を訴えたものである。

私はこの言葉を目にし、その意味するものを知った時、「聞き書き」における話者、聞き手の「その後」に思いが至った。

V. 「聞き書き」におけるバタフライ効果

(1) 「聞き書き」の講義を受けた学生たちの「看護に関わる心」の著しい変化

たとえば、3年前より「聞き書き」を看護学の課目のひとつに採用した福岡女学院看護大学⁶⁾では、講義で、「聞き書き」の方法を学んだ学生たちを実習として老人ホームに数回うかがわせ、「聞き書き」をさせる画期的な試みをしている。

以下は「聞き書き」を実践した学生からの私宛の手紙の文面である。

聞き書きの講義を受講した後、六十代後半という若さで癌となり、残り少ない時間を自宅で生活されている方の聞き書きをさせていただきました。薬の副作用できつい状況であるにもかかわらず、回を重

ねるごとに話のネタはどんどん出てきて、相手の方には「次々と思い出が蘇ってくるわ」、「まさか初対面の人にこんなことまで話すとは思わなかった」などとたくさんの喜びの言葉をいただきました。

その時、私は「寄り添う」ということはどういうことなのか、改めて考えさせられました。私に看護を求めている方がどのように生き、何を感じてきたのか、その核となる部分に触れ、ともに感じることで、その方が残したいことのお手伝いのできたのかなと思います。

今後はこの経験をもとに、患者さんがどのような状況であろうとも、また私自身がどんなに忙しい状況であっても、患者さんの今だけを切り取って看るのではなく、生まれてからさまざまな経験を経て、今という時を過ごしている。また、これからもその人生という道は続き、その道を繋いでいく人たちがいるのだということを感じながら、患者さんに関わっていきたいと思うようになりました。(看護学部4年 S・K)

また、こんな文面もあった。

今回の「聞き書き」の実習を通して、「この人なら話してもいいな」と思われる看護師になることがなにより大事だと痛感しました。そのために大切なことは、「共感」です。患者さんの身になって、いま、何を訴えたいのかが黙っていてもわかるような看護師になりたいと痛感しました。(同 Y・K)

担当教授⁷⁾によれば、この「聞き書き」の効果は絶大で「これから看護師や保健師として世の中に羽ばたいていくための美しい心の羽を身につけたようだ」と、語っている。

(2) 訪問看護師の「聞き書き」直後に起こった奇蹟

また、こんな話も報告された。

ある訪問看護師が老夫婦の家を訪問した。目的はこの家の主婦。暗い部屋で電気のついていない炬燵に入り、ヒーターの前で横になっている高齢のKさん。訪問されることを極端に嫌い、診察されることも頑なに拒否していたからだ。

そこでしかたなく、訪問看護師は隣りの部屋で、

夫の「聞き書き」をはじめた。

夫は自分が忙しさを理由に、妻をこんな状態にしてしまったと辛い胸をうち明けてくれた。そして、妻と初めて出会った時のこと、貧しさゆえ、子供を高校に行かせることのできなかった無念等を語った。

訪問看護師は、その言葉をテープに録り、いったん帰宅した。その翌日、奇蹟が起きた。夫から看護師に泣き声まじりで電話があったのである。「神様が降りてきた！ 女房が病院に行くって、いま出かけていったんです」

あとでわかったことだが、隣室で夫が訪問看護師に「妻子に苦勞をかけた」と話しているのを、妻は正座し、手を合わせて聞いていた、という。

(3) 元看護部長が定年後、地域で「聞き書き」の輪を広める

また、富山県の病院で長く看護師をして勤務していた女性⁸⁾は、病院勤務時代に「聞き書き」を知り、「人は物語を生きている」という言葉を胸に、看護師として病院に勤務しながら作品を制作し、「語り手」に大変に喜ばれた。

その経験から、定年になって戻った故郷で、「聞き手」という肩書の名刺をつくり、自ら先頭に立って、「聞き書き」をボランティアとして、地域に広めている。

その名刺には表裏にわたって、故郷の風景の写真とともに、こんな文字が躍っている。

「聞き書き」の波紋を拡げんまいけ！

つるぎの麓の上市町⁹⁾に、人生の物語がいっぱい、聞かせてもらえんけ、あなたの人生を。「聞き書き」とは、お年寄りの話を聞き、その話をその人の喋り言葉で書き、一冊の本にして差し上げる活動です。

言葉だけを聞いても、後世に遺らない。多くの人生の物語を聞き、話し言葉で後世に遺すだけで、みんなの心が美しくなる。そんな地域を夢見ています。

(4) 「聞き書き」を始めた主婦が変わった

ここまでは医療、看護、介護に関する例が多かったが、その不思議な力は、「聞き書きボランティア」の世界でも表れている。

神戸在住の「聞き書きボランティア」の主婦¹⁰⁾は、

「聞き書き」を始めてからの自分の変化について、こう記している。

数年前のわたしは幼い娘を抱えて引きこもり、社会との接点もママ友も見つけられない、どんよりした若い母親でした。ただ遠く北海道に住む祖母の話だけはいつかわたしが書き残したいと思い続けていました。でも、その方法がずっと見つかりませんでした。

その時、「聞き書き」を知り、方法を教えていただいたことで、祖母の話を一気にまとめることができました。

するとどうでしょう。職場で出会う「人生の先輩たち」の話もいつか聞かせていただきたいと思うようになり、仲よくなりたいたいという気持ちから、心がふーっと開いていきました。おかげでいま、聞き書き仲間もたくさんでき、多くの人たちから話をうかがえるようになりました。ありがとうございました。

(5) 「聞き書き」によって、認知症の母親が愛おしくなった

Aさんの母親は、かなり認知症が進み、毎日、大声でとんちんかんな言葉を発し、世間体を気にして、デイケアサービスにも参加させなかった。

だが、「意味不明でもよいから、日付を入れ、発した言葉を状況とともに記録する」という方法で聞き書きをはじめると、突然、毎日が楽しくなった。なぜなら、それまで「お母さん、しっかりしてよ」と怒鳴りたくなるほどの母の非論理的な言葉が、収集によって「もっとおもしろいことを言わないかな」と思うようになったのである。

それによって、母に愛情を感じるようになり、母のおかしな言葉をまとめ、数冊の本にした。外に行けば、もっと別の言葉を発するかもしれないと、デイケアにも連れて行った。いまでは、Aさんの母は何も話せず、寝たきりである。

とんちんかんでもいい。元気で怒鳴っていた母が懐かしい、とAさんは思っている。

そのほか、「相手の語りたいたいことを熱心に聞く力は必須で、私はこれを食べたいと言われるような人になりたい」と管理栄養士も「聞き書き」の効果を

語ってくれた。また、定年後、「聞き書き」を始め、十数冊も聞き書き本を書いた男性は、妻から「あなたは聞き書きを始めてから、優しくなった」と言われたという。これも、「聞き書き」におけるバタフライ効果のひとつかもしれない。

VI. まとめ

この稿では、「聞き書き」というコミュニケーション・ツールについて、その目的から方法などを広く浅く紹介した。

そして、そのなかでも、いま無限の可能性を示しているのが、「聞き書き」をすることによって生じる「聞き手」の変化である。

この変化を私は気象用語に喩えて「バタフライ効果」と呼んだ。しかし、なぜ、その変化が無限かといえば、「聞き書き」が「語り手」と「聞き手」のふたりだけで行われるため、ふたりの間に、いつ、何が生まれるかわからないからである。

白の「語り手」と赤の「聞き手」で、必ずしも「ピンク」が誕生するとはかぎらないのが、「聞き書き」のおもしろさであり、楽しさである。「聞き手」が青だったら、作品は緑になるか。決して、そうはならない。白のままかもしれないし、突如、紫になるかもしれない。

「語り手」の話聞き、思わず亡くなった自分の母を思い出し、母の墓前で泣いた「聞き手」もいた。「聞き書き」本によって、それまで断絶していた父と息子が和解したという話もある。赤と白で、黄色が生まれることがあるという「奇蹟」。「奇蹟」は、また次の「奇蹟」を生むかもしれない。

「語る」こと、「聞く」こと、「書く」ことの三つの「行動」によって、「感動」という予想もできなかった「奇蹟の結果」が得られるのも、「聞き書き」が、間違いなく血の通った人間同士のコミュニケーション・ツールである確かな証明であろう。

次に全国各地で、どんな「奇蹟」が生まれるか、楽しみである。

* 1945年生まれ。聞き書き作家。主な聞き書きに「勘九郎芝居ばなし」(朝日新聞社)
「福本清三 どこかで誰かが見ていてくれる」

(集英社) などがある。

注

- 1) 1999年5月10日初版発行(小学館) 三木のり平・小田豊二共著
- 2) 客と芸者のための貸座敷。
- 3) 長崎市「ドクター・ネット」代表 藤井卓
- 4) 富山県砺波市砺波総合病院
- 5) 宮崎市細見クリニック 院長 細見潤
- 6) 福岡県古賀市。福岡女学院は1885年創立の福岡

英和女学校が前身。看護大学は2008年開設。「他の人の看護を通して看護される側も看護する側も共に人として成長する」ヒューマン・ケアリング教育を実践している。2016年 看護師実就職率日本一。

- 7) 松尾和枝教授 / 酒井康江准教授
- 8) 山崎列子
- 9) 富山県中新川郡上市町。劔岳, 大日岳, 立山連峰等に囲まれる人口約2万人の静かな町。
- 10) 井上綾子, 神戸市東灘区在住。